

## 飛田先生を送る

辻井 榮 滋

1986年4月から僕が立命館大学にお世話になって間もなくのこと、「君の任用審査の時、飛田先生が“辻井君のことは、僕のドイツ語のクラスにいて、よく覚えている”と言っておられた」と、どなたかからお聞きしたことがある。大勢の学生を教えてこられ、それも20年以上も昔の1学生のことをよくぞ覚えていてくださったものだ、と感激したり感謝したりもした。それから、同僚としておつきあいいただいて早9年の歳月が過ぎ去ろうとしている。この間、そんな恩師に大した恩返しもできなかったことが悔やまれる。ただ、一貫して続けてきたJ・ロンドンの研究と翻訳の仕事によって、ロンドンを多少なりとも日のあたる所へ引き出すことができたことで、先生に喜んでいただけるなら、こんなにうれしいことはない。

僕が学部の1回生時に先生から第2外国語としてドイツ語をお習いしたのは、1963年の4月から1年間であった。かれこれ30年も昔のことになる。今はなき広小路学舎の、有心館（梨木神社の北側）においてであった。つい数年前のこのように思いだされる。その時のテキスト2冊は、今も書斎の身近なところに置いてある。手に取って読み返すことはほとんどなかったが、今回何十年ぶりかで開いてみると、有心館の教室で若き日の先生——何とあの時35歳であられたのだ——が穏やかな口調でドイツ語初学生の僕たちを指導してくださっているご様子が、ありありと目に浮かんでくる。読本・文法書ともに薄いハードカバーで、濃いえんじ一色の読本には DEUTSCH の金文字が入り、黄土色一色の文法書には DEUTSCH GRAMMATIK FÜR ANFÄNGER と同じく金文字が入っている。横8.5センチ×縦約7センチの紙が、奥付として貼付されている。読本のほうは「ドイツ語読本」で、「1963・4・5 第二刷」とあり、価格は「¥250」となっている。もう一方の文法書は「ドイツ語文法」で、「1963・4・5 第一刷」とあり、価格は「¥280」とある。編者は共に「立命館大学ドイツ語研究室」、発行所も共に「法律文化社」となっている。……

あれから30年もの年月が流れているのに、先生は少しもお変わりになっていない。穏やかな物腰・外観が30年前とほとんど同じなのが、僕には不思議でならない。若い時には人に厳しく、円熟するにつれて人に優しくなるというが、先生はあの頃から一貫してこわい顔をなされたことがない。きっとご自分に厳しくあられた姿勢の裏返しとして僕たちには優しくしていただいたのだろう、と信じて疑わない。

先生、長い間ご苦勞様でした。本当にありがとうございました。これからもいつまでもお元気でいらしてください。